

モンバサのムスリム女性組織 その歴史と現状(特集 1ケニア・タンザニアの今)

著者	宇佐美 久美子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1999-09
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008370

モンバサのムスリム女性組織

その歴史と現状

宇佐美久美子

Ⅱ はじめに

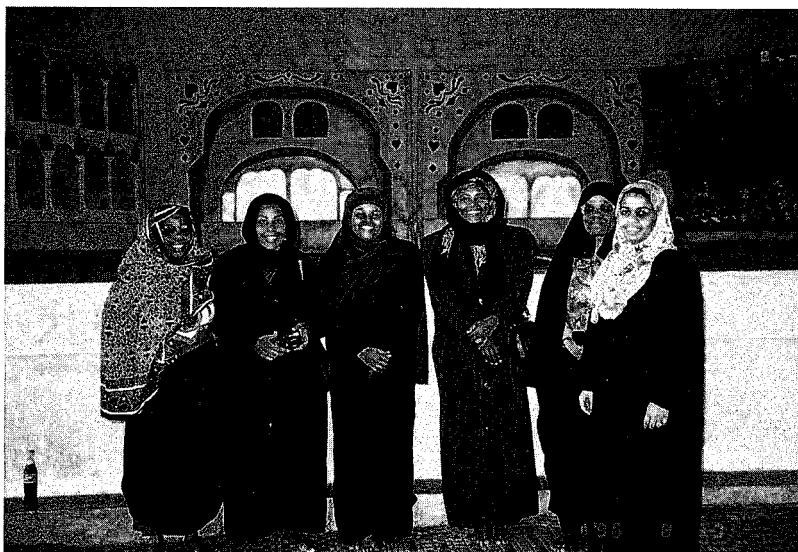
ケニア第2の都市である港町モンバサは、古くからインド洋交易圏の重要な拠点であった。モンバサを含む東アフリカ海岸地域には、インド洋をわたる季節風を利用して、帆船ダウがはるばるとアラビア、ペルシアやインドから訪れたのである。このため7世紀にはアラビア半島からイスラームが伝播したと言われている。そして、外来のアラブ・ペルシア文化と現地のバントゥー系文化が接触融合した結果、アフロ・アジア的なスワヒリ文化が誕生したが、このとき、その支柱のひとつとなったのがイスラームであった。

植民地期にモンバサがウガンダ鉄道の起点として海上と陸上の交通の接合点になると雇用機会を求めて数多くの内陸部出身者が流入するようになった。この新住民の大半はキリスト教徒であったため、ムスリムの町としてのモンバサの特質は次第に失われていった。しかし、それでもモンバサは

ケニアにおけるイスラームの中心のひとつとしての地位を保ち続けている。

なかでもオールドタウン (Mjua Kale) と呼ばれる地区は、古くからのムスリム住民が集中しているため、イスラーム色がひととき濃い地区となっている。このことは、オールドタウンに足を運び、くねくねと迷路のように交差する路地に身をおいて、イスラーム風の帽子をかぶった男性やブイブイ (buihui) と呼ばれる外衣で体を覆っている女性が行き交うのを目にすれば肌で感じ取ることができるだろう。

このオールドタウンの片隅で、ムスリム女性の組織も産声を挙げた。40年ほど前にブイブイに身を包んだ女性たちが集い、自分たちの課題を真剣に語り合ったのである。ここでは、このようなモンバサのムスリム女性の一組織の歴史と現状のあらましについて紹介したい。なおモンバサのムスリム女性組織に関する先行研究としては、ストロウベル (M. Strobel) の *Muslim Women in Mombasa, 1800-1975*, Yale University Press, 1979の



ムスリム女性協会の
コミュニティーメンバー

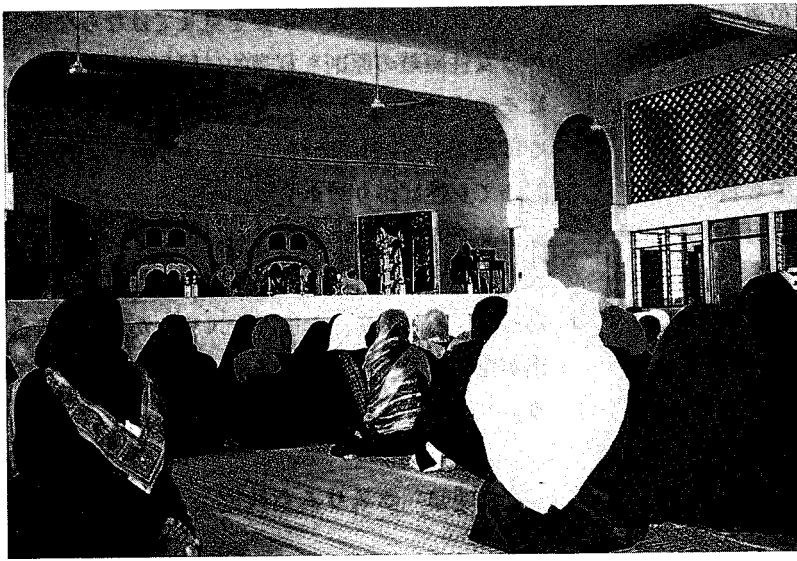
第7章がある。同研究は、レレママ（1890年代から1930年代にかけて流行したムスリム女性のダンス）グループとの比較の視点から、ムスリム女性組織が性別隔離からの脱却に果たした意義を評価する一方で、エリート女性主導型の組織ゆえの限界や、女権拡張よりも自らの宗教や民族の利害を優先した点を指摘している。本稿は、同研究を手がかりに筆者が1996年および97年の夏に実施した現地調査のデータにもとづくものである。

1 アラブ女性協会の設立

モンバサでは、1950年代にアラブ女性協会(The Arab Women's Institute)とアラブ女性文化協会(The Arab Women's Cultural Association)という二つの女性組織が相次いで設立された。これらはいずれも、モンバサ在住の白人やインド人の女性組織のように、ムスリム女性も独自の組織を結成して、「進歩」に遅れをとらぬようにしようという自覚に基づく動きであった。つまり、ムスリ

ム女性だからといって「女性隔離の原則」に甘んじ、家庭に引き籠ってはいけなさと自ら立ち上がったのである。

ここでは、二つの女性組織のうち1957年12月に設立されたアラブ女性協会を取り上げて考えていきたい。組織化に貢献したリーダーは、ビ・ウブワ(Bi Ubwa)といい、ザンジバル政権からモンバサの総督に任命されていたムバラク・ヒナウェイ(Mbarak Hinaway)の妻であった。ビ・ウブワらが組織を設立しようと動き出したのは、ムスリム女性組織がないことをインド人女性から愚弄されるという屈辱的な出来事に遭遇したためであったという。さっそく彼女の住まいの一室に有志が集い、いくども話し合いが重ねられることになった。そしてオールドタウンのあらゆる地区の女性に参加を呼びかけるため、適任と考えられる者が選ばれた。ビ・ウブワ自身は組織設立を目前にして亡くなったが、その遺志を継ぐべく選出された40名の設立メンバーが組織の土台造りに尽力することになったのである。



設立時に同協会の目標として掲げられたのは次の3点である。まず、ケニアの、特にモンバサのあらゆるムスリム女性と連帯し、諸権利を求めて闘うこと、次にイスラーム法の枠内において近代的生活様式の理解に努め生活改善を奨励すること、そして困窮家庭の子女を対象とする奨学金制度を設立することであった。

ここで注目すべき点は、組織名に「アラブ」と掲げられているにもかかわらず、あらゆるムスリム女性との連帯が強調されていることであろう。筆者の調査時にも、同協会のメンバーは異口同音に、ムスリムであれば、インド人でもアフリカ系住民でも設立時から参加を歓迎してきたと強調していた。彼女たちによると、設立時の名称にある「アラブ」とは、オールドタウンに居住する女性、つまりアラブ、スワヒリ、そしてパキスタン南部のバルチスタン出身のバルーチなどのムスリム女性の総称にすぎないというのである。たしかに設立メンバーの顔ぶれを見てみると、いわゆるアラブだけではなくバルーチなどの女性も含まれて

いる。しかし、やはり大半の者がビ・ウブツのようなオマーン出身のアラブ女性であったことは否定できない。また、裕福な者ばかりでなく貧しい者にも開かれた団体をめざしていたとの説明を受けたが、ストロウベルが指摘しているように英語の組織名に対応するスワヒリ語の名称がないことから、大衆組織への発展をどこまで真剣に考えていたのか疑問である。もちろん、組織の中核を占めていたのがエリート女性であったことは短所とばかりは言えない。彼女たちの中にはカイロやイギリスへの留学経験を有する者もいて、幅広い知見を活かして新しい組織を運営していこうとしたことがうかがえるからだ。

では、メンバーが口を揃えて同協会は閉鎖的な組織ではなかったと強調するならば、そもそも誤解を招く「アラブ」という言葉を組織名に冠したのはなぜだろうか。これを考えるためには植民地期のヒエラルキーに注目する必要がある。植民地政府の方針では、白人入植者が階層の頂点に、つぎにアラブやインド人が、そしてスワヒリを含む

アフリカ系住民は社会の最下層に位置づけられていた。サリム (A. I. Salim) の研究によれば、モンバサのスワヒリの氏族の中には、アラブを自称してアフリカ系住民のカテゴリーから脱しようとする動きすらあったという。ここでもおそらく同協会は、白人女性やインド人女性に対抗するためにも、社会階層の上位に位置することを強調しようと、あえて「アラブ」を名乗ったのではないだろうか。植民地体制内の階層秩序を当然とみなしていた点、そしてアフリカ系住民に優越することを明示することで結果的に組織を閉鎖的なものにしたことが同組織の限界といえよう。

また植民地統治に対して、同協会が無批判で現状肯定的な組織であったことは、組織設立の直接的動機にも明らかである。彼女たちは、宗主国からの貴賓を迎える公式の席にムスリム女性の代表を送り出すことによって、インド人女性や白人女性と肩を並べたいという願いから組織設立に奔走したのだ。彼女たちには、植民地支配者が連なる宴席に対する反発はなかったのである。

同協会の組織化の限界をもう一つ付け加えるならば、ストロウベルも指摘しているように、女権拡張論的な動きとは必ずしも評価できない点が挙げられる。彼女たちは有職女性として経済的自立の道をめざしたわけでも、男女平等を唱えたわけでもなく、その運動はあくまでもイスラーム法の枠内にとどまり、女性に課された社会的役割を大きく逸脱するものではなかったからだ。彼女たちの取り組みは、自助活動、慈善活動、そして生活改善運動というきわめてささやかなものにすぎなかったのである。

しかし、たとえ現在のわれわれの目から見れば大きな成果を挙げたとは言えない運動であっても、当時のメンバーにとっては非常に意義深いものだったことを理解すべきだろう。敬虔なムスリム女性

であれば人前にみだりに姿を見せてはならないという女性隔離の原則を意識的に冒したこと、さらにその意義を伴侶や親兄弟に説得したことは大きな前進であった。同協会の会合のため、生れてはじめて女性ばかりでホテルに足を踏み入れた時の胸の高鳴りを当時のメンバーは今でも覚えてはいるのだ。このような小さな積み重ねがあったからこそ、その後のムスリム女性の社会進出が可能になったことを軽視してはならないだろう。

II 2 ムスリム女性協会の現状

その後、同協会は、ムスリム女性の参政権運動において中心的役割を果たすなど政治への傾斜を強めた時期もみられたが、現在は政治色のきわめて薄い組織となっている。ケニア独立後の1964年には、閉鎖的な組織であるという無用の誤解を避けるためムスリム女性協会 (The Muslim Women's Institute) と改称して現在に至っている。

設立時にはわずか40人であった同協会も、現在では約350人の登録メンバーを抱える組織に成長し、なかにはインド系やアフリカ系の女性もみられるようになった。その主な活動には、洋裁やタイプなどの職業訓練クラスや小学校低学年対象の宗教クラスの運営、奨学金制度、募金活動、メッカ巡礼ツアーの企画運営や宗教行事などがある。このうち、奨学金給付対象者とメッカ巡礼ツアー参加者には男性も含まれているが、それ以外はすべて女性のみを対象としている。

このうち筆者は、1996年夏に宗教行事の一つであるムハンマドの生誕祭マウリッドに列席する機会を得た。日暮れて涼風が吹くころに同協会のホールが色とりどりのブイブイを着飾った女性たちで一杯になると、舞台上でコーランの朗唱が始まった。

これがなんと筆者が驚いたことには、スワヒリ語訳の朗唱だったのである。コーランを他の言語に訳してはならないという原則に背くきわめて稀な例ではなかろうか。後日何人かのムスリム男性に尋ねてみるとみな一様に驚いていたため、どうやら同協会独自の方式のようである。アラビア語が不得手な女性に教義を正確に伝えようと、あえて教えに背いて現実的な対応をとっていることが非常に印象的であった。

また、現在の同協会の活動がケニア一国にとどまらず国際的な広がりをもつようになった点も見逃せないだろう。たとえば1975年に同協会が専用のホールを建造した時には、サウジアラビア、イラク、オマーンなど数多くのムスリム諸国からの寄付が寄せられているし、94年から開始された巡礼ツアーのプロジェクトもサウジアラビアとの緊密な連携のもとに実施されている。

113 モンバサにおけるブイブイ着用の拡大

●女性隔離原則への回帰●

1996年、97年の調査で筆者にとって最も印象的であったのは、ムスリム女性が体の線を隠すための外衣、ブイブイの着用についての変化であった。筆者が最初に訪れた約20年前に比べるとブイブイ姿が目立つように思えたのである。以前はブイブイに見向きもしなかったローティーンの少女でさえ積極的にブイブイを着用しているではないか。

さらに、サウジアラビアのチャドルのように頭の前からつま先まで体の線をすっぽりと覆い隠すタイプのものを身につける女性の姿さえみかけた。ブイブイの着用率が増加したのではないかというのは筆者の思い過ごしではなく、ムスリムの友人たちも同意見であった。たとえば、ムスリム女性協会設立メンバーの一人と話しているときに最近のブイブイ姿の増加にふれると、彼女は自分たちが勝ち取った女性隔離原則の緩和が後退しているのではないかとかすかな懸念を口にした。彼女のように、ムスリム女性を拘束する隔離の原則から抜け出そうともがいた経験を持つ者の目には、半世紀を経てふたたび若い世代が女性隔離のヴェールの中に閉じ籠ろうとしていることが非常に気にかかるようであった。

モンバサでは半世紀にわたってムスリム女性が女性隔離の原則に風穴をあける努力を重ねていったというのに、なぜ近年になって女性たちは同原則に進んで従うようになったのだろうか。なぜ若い世代のムスリム女性は、祖母や母の世代が勇気をふるって脱ぎ捨てたブイブイを再びまとうようになったのだろうか。これを、彼女たちの意識の後退、運動の変質ととらえるべきなのだろうか。このような疑問に答えるために、ムスリム女性協会の将来を担う若い世代の意識を明らかにすることを今後の課題としたい。

(うさみ・くみこ／川村学園女子大学非常勤講師)